

住んでみたバーレーンからの報告

バーレーン駐劄特命全権大使
角 茂樹

中東の湾岸に位置するバーレーンは、アラビア半島の真珠と称えられる美しい島国である。

そんなこの国で2011年2月から3月にかけて住民の多数を占めるシーア派による反政府デモが発生し政府治安部隊と衝突した結果、警察官、民衆双方に30名以上の犠牲者を出すといった惨事があった事は記憶に新しい。日本では、チュニジア、リビア、エジプトで起こった一連の「アラブの春」がバーレーンに飛び火したものと報じられた。バーレーンにおいては、王家がイスラム教のスニー派に属するが、国民の6割から7割はシーア派であるという特殊事情がある。2011年の騒動は、この多数派の住民が、スニー派支配に反発した事が原因であると考えられてきた。しかし物事は、そう単純ではない。まず他の「アラブの春」が起こった国とこの国が決定的に違う事は、バーレーンは、湾岸の中ではもっとも進んだ民選による議会を持ち、税金はなく教育も医療費もタダな豊かな国であることである。また、伝統的な部族の合議制が生きているこの国においては、王家の決定も話し合いでなされているように、イラク、チュニジア、リビアで見られたような意味での独裁はない。この見方をすると今年の騒動は、単に「iPhone4 やシャネルの香水で身を固めた豊かなシーア派の連中が騒げば政府からさらに何かもらえると思ってやっただけ」と言うことになる。

ハマド国王のイニシアティブにより政府は、スニー、シーア両派住民の融和のための話し合いを呼びかける事で事態の收拾を現在図っている。2013年1月から国王のイニシアティブが功を奏し、関係者が一堂に参加する国民対話も開始された。ただ、シーア派が、国民の多数を占める自分たちこそが政府と議会で主流となる仕組みを作る事が話し合いの条件であるとしているのに対し、政府は、そんな前提条件は、認められないとしており、話し合いは続けられているが、大きな進展は見られていない。この双方の論争で銘記すべき事は、部族社会の風習が強く残るこの国において、仮にシーア派が議会、政府で多数を占めた場合、自分達だけの利益追求に走る危険性がある点である。更に、イランに影響を受けたシーア派宗教指導者が過激な言動を繰り返して反政府感情を煽っているとの問題もある。事実、今住民を怒らせているのは、学校からドロップアウトしたシーア派の若者が、一部の無責任な大人の煽動によってタイヤを焼いたり、警察官に火焰瓶を投げつけたりするという蛮行を繰り返していることである。これに対してもシーア派の聖職者と政治家は明確な非難を行わず暴力を黙認している。黙認しているどころかシーア派の宗教指導者の一人は、警察官に対する暴力を命じるような発言を行った。だから政府からしてみれば、民主主義と人権を訴えるシーア派組織の内部に人権と民主主義そして話し合いによる解決の原則を確立することが先決という事になる。国際社会が、バーレーンの改革を期待するのであれば政府にだけではなくシーア派の指導者にも反省を促さなくてはいけない。

こうした中、2012年4月、ハマド国王が3日間の日程で公式に日本を訪問し天皇陛下による午餐会、野田総理との会談、国会訪問を終えて帰国した。野田総理からは明確にバーレーンが透明性と表現の自由に立脚した政治改革を行うべきである事を伝え、人権対話を行う点でも合意した。日本が国王を招待した事には理由がある。日本にとってバーレーンは、シーア派とスニー派の本国をそれぞれ自認し対立するイランとサウジアラビアとの中間に位置し米国第5艦隊の司令部がある地政学的にも重要な国である。石油と天然ガスを依存するペルシャ湾とアラビア半島が安定するためにはバーレーンが安定してくれなくては困るのである。

現在、このバーレーンで国王の訪日に続く形で経済の仕組み、教育制度、警察制度を含む幅広い分野で日本から学ぼうとのブームが起きている。この国で今でも大きな話題となっているのは2012年7月に、ハマド国王とサビーカ王妃が私と家内だけではなく在留日本人90人を招待した

大晩餐会を王宮で催したことである。この日本に対する異例な取り扱いは、国王がいかに日本政府だけではなく民間にも協力を期待しているかの現われである。さらに2013年3月には、サルマン皇太子の訪日を実現した。サルマン皇太子は東京で天皇陛下、皇太子、安倍総理と会った他、京都をも訪れ、日本文化に対する理解を深めた。このような状況を踏まえれば、日本に今求められているのは、バーレーン国王の平和的な国内融和の努力と国の発展を官民あげて支援することではないだろうか。